

# ペルー国コンチュコス地域観光振興調査報告書

大 谷 博 則

Informe preliminar del promoción turístico en zona Conchucos, Perú.

Hironori OTANI

奈良大学大学院研究年報 第16号別刷 平成23年3月

Reprinted from Annual Reports  
of The Graduate School of Nara University  
No. 16, March 2011

# ペルー国コンチュコス地域観光振興調査報告書

大 谷 博 則\*

Informe preliminar del promoción turística en zona Conchucos, Perú.

Hironori OTANI

## 要 旨

ペルー国アンカシュ県東に位置するコンチュコス地域での地域観光振興活動に関する2007年以降の調査成果をまとめたものである。同地域では地域住民を含めた地方自治体や地元NGOなどの活動により21世紀に入り活発な地域観光振興を目的とした活動が進められている。本調査では、このようなグローバル化社会に包括されながらも自立をめざす地域社会の動きを把握することを目的としている。はじめに、国際的、国内的レベルといったマクロな視点から県、郡といった地方自治体、地元NGOなどミクロな視点での観光を取り巻く動向を取り上げている。次に、同地域の現況を地理的・歴史的背景を含め概観している。最後に、同地域に所在する観光資源を整理し報告している。以上から、地理的に南北に分断されるコンチュコス地域では、インカ時代に遡る南北軸の交通路（インカ道）の保全・活用を進める、新規観光ルートの開発が必要とされている。

キーワード：ペルー、コンチュコス地域、地域観光振興、観光資源

## I 調査概要

### 1. 調査目的

ペルー国アンカシュ県に位置するカエホン・デ・コンチュコス地域において、文化遺産の保全による、地域社会の持続可能な発展を目指すための地域観光振興を検討するうえで必要となる基礎資料を整理するため、調査を実施した。

同地域には、世界遺産に登録されているチャピンの考古遺跡やウワスカラン国立公園の東裾に位置しており、数多くの観光資源に恵まれている。また、世界遺産暫定リストに登録されるカパック・ニャン（以後、インカ道）も通過している。また、その残存状態は極めて良好な区間が多くトレッキングなどの観光ルートとして高い可能性を秘めている。

しかしながら、交通アクセスの悪さ、宿泊施設の不足やインターネット環境の不備など観光インフラ整備の遅れに加え、観光代理店の欠如、観光業に携わる人材不足などの理由から、観光客  
平成22年9月17日受理 \*文学研究科文化財史科学専攻博士後期課程

の誘致が進まない状況にある。

本稿では、はじめに、マクロレベル（グローバル・国・県）での観光を取り巻く社会的、経済的、政治的環境の動向を明らかにするため、国や県の観光政策やプロジェクト、ペルー国内、アンカシュ県内における観光動向を扱う。さらに、ミクロレベル（カエホン・デ・コンチュコス地域内）では、地元NGOのような支援組織の活動を取り上げる。

次に、同地域社会の現況を把握するため、地理的、歴史的、社会的、経済的環境、ならびに通アクセスと観光インフラの現状を概観する。

最後に、同地域に所在する活用・保全対象となりうる観光資源を行政区単位で扱う。今回扱う観光資源の多くはINEI-Ancashにより2004年に刊行された出版物に基づいている。そのため、各資源の説明や写真に不足する点が多く、今後の調査で解消する必要がある。

以上これらの資料から、同地域における観光を取り巻く問題点を検討している。

## 2. 調査期間

事前調査：2007年10月01日～2007年11月26日

第1次調査：2008年10月09日～2009年02月04日

第2次調査：2010年09月02日～2010年09月28日（高梨財団助成による）

### 2007年

10月02日～10月13日 ペルー文化庁リマ本部（以下、INC-Lima）にて聞き取り調査

10月14日～10月15日 観光案内所ワラス市内にて聞き取り調査

10月15日～10月17日 天然資源国立研究所 ウワスカラン国立公園事務所  
（以下、INRENA-Ancash）にて、文献・地図資料調査

10月16日～11月16日 リヤマ・トレック事務所にて、リヤマ・トレックの活動歴を調査

10月19日～10月20日 ペルー統計情報国立研究所アンカシュ支部（以下、INEI-Ancash）にて、統計資料を購入

### 2008年

10月14日～10月15日 観光案内所サン・イシドロ地区にて聞き取り調査

10月28日～10月30日 ペルー通商観光局（以後、MINCETUR）内に所属するペルー政府観光局（PromPerú）にて、聞き取り調査

11月07日～11月08日 INEI-Ancashにて、地図資料と統計資料を購入

11月09日 ビスコバンパ・アルフォンブラ協会の即売会に参加

12月09日～12月10日 DIRCETUR-Ancashにて資料調査と、局長への聞き取り調査

12月19日 山岳研究所（以下、I. M.）にて資料調査と聞き取り調査

12月21日 チャピンの考古遺跡でのカバック・ライミに参加し、チャピン国立博物館を訪問

### 2009年

01月09日～01月10日 ビスコバンパ市にて、誕生祭に参加

01月11日 サン・ルイス市にて、観光調査後、ワチュコチャ（Huachucocha）にて、

	酪農工場を訪問
01月11日～01月13日	アルパカ牧畜を行うカニナコにて、聞き取り調査
02月04日	i-Perú（リマ・ホルヘ・チャベス空港内）にて聞き取り調査
2010年	
09月03日～09月05日	リマ市内にて、文献調査
09月06日～09月07日	リマ市内土地の不法居住承認委員会（以下、Cofopri）とINGにて地図資料を購入
09月08日	リマ市内INC-Limaにて文献調査の交渉開始 ワラスに長距離バスにて移動
09月09日	ワラス市内INC-Ancash、INEI-Ancash、INRENA-Ancashにて聞き取り調査 ワラス市立図書館、ドニャ・ニャティ公立図書館（INC-Dofia Nati）にて、文献調査 i-Perú（Huaraz）にてコンチュコスへのアクセス確認

### 3. 方法

本調査で整理、報告するデータは、2007年から2010年までに実施した現地調査と調査期間外に行った文献調査、インターネット調査などの形で収集された。ここでは、データの収集について説明を加えておきたい。本調査に関連する論文や行政文書を分析するとともに、関係者への聞き取り調査を実施した。

本調査は今後も継続していくものであり、2010年9月現在までに入手できた情報をもとに整理、報告してある。そのため、不足している箇所もある点を指摘しておきたい。2011年以降の調査において補完したい。

## II 観光を取り巻く社会・経済環境の動向

### 1. 観光動向

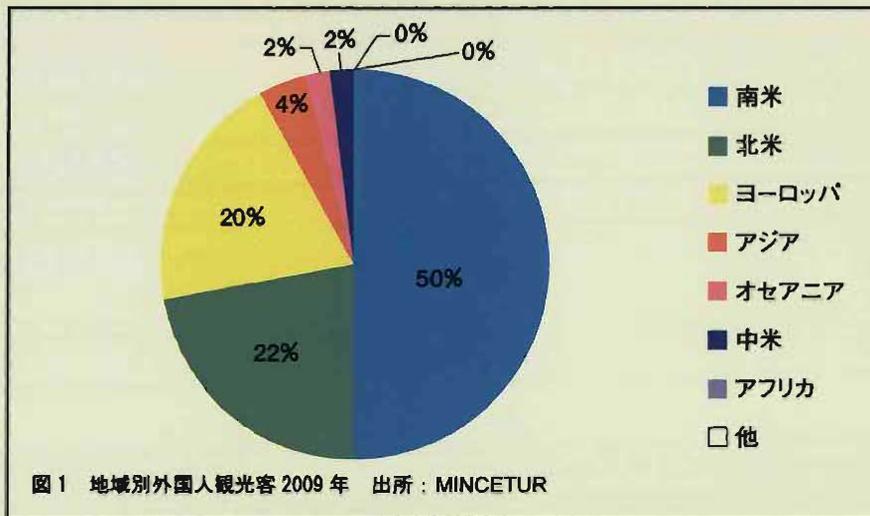
表1によると、2002年から2009年までに外国からペルーへ観光を目的として入国してきた人数は、過去8年間で延べ1295.5万人であり、年間平均約161.9万人である。さらに、外国人観光客からの観光収入は延べ131.78億ドルであり、年間平均約16.47億ドルである。地域別にみると（図1）、南米からの来訪者が全体の50%で最も多く、次いで北米（22%）、欧州（20%）と続き、アジアからは約4%である。国別にみると（表2）、チリが最も多く約23%、2位は米国で19%と続き、3位以下上位はエクアドル、アル

表1 外国人観光客来訪者数及び観光収入

年	外国人観光客数	観光収入
2002	1063606	837000
2003	1135769	1023000
2004	1349959	1232000
2005	1570566	1438000
2006	1720746	1775000
2007	1916400	2007000
2008	2057620	2395000
2009	2139961	2471000
合計 (平均)	12954627 (1619328)	13178000 (1647250)

出所：MINCETUR

注：観光収入の単位は千米ドル



ゼンチン、ボリビア、コロンビア、ブラジルと南米諸国が占めている。欧州からは、スペイン、フランス、英国などが多い。また、アジアでは日本からの来訪者が多い。

次に、ペルー国内観光客の動向は以下の通りである(表3)。2002年から2009年までの国内観光客数は、過去8年間で延べ1.3億人であり、年間平均約1685.5万人である。国内観光客からの観光収入に関しては不明である。

Region-Ancash (2008)によると、これらの観光客のうち、アンカシュ県の占める割合は外国人観光客が3%、国内観光客は7%である。外国人観光客に関しては、ペルー南部との較差が大きくみられる。アンカシュ県では国内観光客の誘致政策を進めていることも、国内観光客の占める比率の高さを支える一因と考えられる。この国内観光客の振興政策は2010年で終了するため、今後の展開が期待される。

アンカシュ県への観光客はペルー最高峰のワスカラン山Huascarán (6395m)、ワントサン山Huantosan、ワンドイ山Haundoy (6395m)、チョピカルキ山Chopicalqui (6354m)といった6000m級の高峰があるコルディエラ・ブランカ山群へのトレッカー達の基地となる。この他、

表2 国別観光客数

	国名	2009年	
1	チリ	456896	23%
2	米国	374659	19%
3	エクアドル	134666	7%
4	アルゼンチン	114176	6%
5	ボリビア	91789	5%
6	コロンビア	86055	4%
7	ブラジル	80940	4%
8	スペイン	79386	4%
9	フランス	64960	3%
10	英国	57949	3%
11	カナダ	52899	3%
12	ドイツ	50228	2%
13	日本	36394	2%
14	ベネズエラ	31486	2%
15	オーストラリア	30770	2%
16	イタリア	30443	2%
17	メキシコ	26260	1%
18	オランダ	25277	1%
19	スイス	17157	1%
20	イスラエル	13583	1%
21	中国	9176	0%
22	スウェーデン	8686	0%
23	パナマ	8399	0%
24	韓国	7804	0%
25	アイランド	7563	0%
	他	126366	26%
	合計	2023967	100%

出所: MINCETUR

表3 2002年～2009年の外国人観光客と国内観光客数と宿泊数の推移：  
宿帳 (INEI2010:995, 20.12)

Modalidad	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
Arribo								
Total	11963746	17286332	18200246	20127408	19159586	21737116	24923037	25654707
Nacional	10529419	14997656	15538561	17167078	16176254	18351113	20467513	21609272
Extranjero	1434327	2288676	2661685	2960330	2983332	3386003	4455524	4045435
Pernoctación								
Total	16444819	22541465	23883772	26334405	26756089	30504126	34336144	35176672
Nacional	13642875	18191216	18779831	20783860	20910252	23849836	26060301	27618475
Extranjero	2801944	4350249	5103941	5550545	5845837	6654290	8275843	7558197
Permanencia								
Promedio 2/								
Total	1,4	1,3	1,3	1,3	1,4	1,4	1,4	1,4
Nacional	1,3	1,2	1,2	1,2	1,3	1,3	1,3	1,3
Extranjero	2,0	1,9	1,9	1,9	2,0	2,0	1,9	1,9

1つ星から5つ星に分類されるホテルの宿泊者数をもとに算出している。そのため、前述の外国人観光客数とは人数が異なっている。

チャピンの考古遺跡へのツアーや鉄分を多く含んだサビ色の温泉バーニョス・テルマレス・モンテレイ (Baños Termales Monterrey)、1970年5月の大地震 (M7.8) の際に生じたワスカラン山の雪崩により埋められた跡地に建設されたユンガイ慰霊公園 (Campo Santo Yungay)、ワスカラン国立公園内にある氷河湖であるヤングヌ湖 (Lagunas Llanganuco)、ワリ時代の遺跡と考えられているウィルカワイン遺跡 (Monumento Arqueológico de Willkahuafn) などが観光資源となっている。

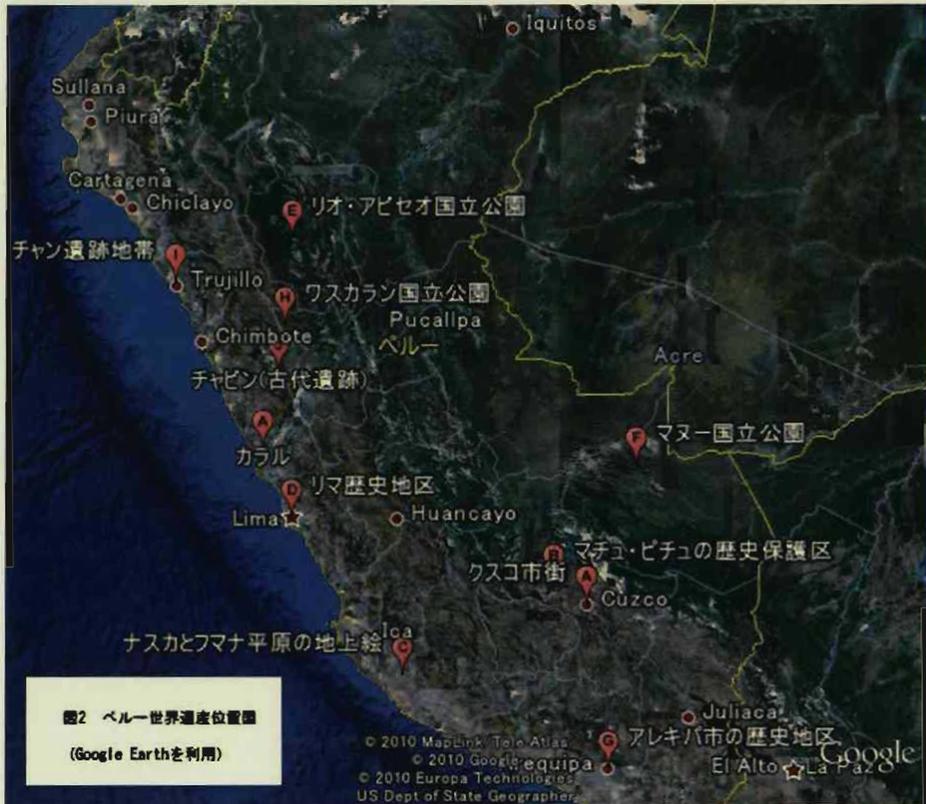
## 2. 観光関連政策

### (1) ペルー政府による政策

ペルー国内にはユネスコ世界遺産に指定された場所が11カ所あり、文化・自然など多くの観光資源を有している (図2)。また、2004年米秘合同探検隊が、北部熱帯雨林にて、1300年前の城塞都市を新たに発見するなど、まだまだ発見・開発されていない遺跡等の観光資源が存在している。しかし、既存の観光資源の保全まで手が回らず、特に地方では一部破壊されているものもある。有名なナスカの地上絵の破壊、リマ市近郊海岸の生活排水による汚染などが挙げられる。

2006年以降の、ガルシア政権による施政方針として、「山岳部の輸出振興<sup>(注1)</sup>」、「プーノ産業・観光・商業自由区の設立<sup>(注2)</sup>」、「漁業、製材業及び観光業等の産業振興に向けた環境整備<sup>(注3)</sup>」、「社会インフラ整備<sup>(注4)</sup>」などが挙げられてはいるものの、その実行性などが懸念されている (細野2007; 88-89)。

このように、政府は、外国人観光客の誘致政策を打ち出し、一部観光客船寄港の増加などの成果を上げているが、新たな遺跡の発掘および保全、既存遺跡の保全、自然環境保護など政府が取



るべき課題が指摘されている（国際開発センター1996；21）。

この他、近年の動向として、2008年4月にペルー、リマにて開催されたAPEC第5回会合では、地域社会に貢献し、所得と雇用を生み、かつ、環境の保全および保護を促進する「責任ある観光に向けて」をテーマに討議が行われ、「パチャカマク宣言<sup>(注5)</sup>」が採択された。また、2010年9月に奈良で第6回観光大臣会合の日本開催が正式決定されており、今後の展開が期待される。

## (2) アンカシュ県行政府による観光政策

アンカシュ県中期政策（Region-Ancash2008a）によると、観光関連政策は以下の通りである。具体的な内容やその実行性に関しては今後も注目していく必要がある。

### ・観光セクターにおける中期政策（2008-2011年）方針

1. 競合する環境下における観光業の開発促進、現実的な手法の導入、ならびに持続可能な発展の実効化
2. 観光業に関わるすべての営利業者との観光市場情報の共有
3. 投資活動の促進、基本的なインフラ整備と観光計画、自然保護区や周辺遺跡などの収入に関する国の権限移譲
4. 観光自由区による投資地域振興と金融プロジェクトの促進
5. 促進、競合、助成の基本コンセプトを支持するための効果的な規制の新規策定

## 6. 現代的で高品質な観光サービスの提供と民芸品生産により地域内で輸出可能な産物の拡大と多様化への援助

アンカシュ県長期計画（Region-Ancash2008b）では、開発計画を策定するため、地理的、歴史的な背景を含めた地域特性によりアンカシュ県を5つの地域に分割している。カエホン・ア・コンチュコス地域は南部と北部に分けられている。

南部は、アスンシオン、C. F. フィッツカラルド、アントニオ・ライモンディ、ワリの4郡23区43村からなる。その面積は4486.5km<sup>2</sup>で、人口は110969人であり、そのうち有権者数は58755人である。観光政策として、新たな観光産物の創出と振興策の強化として下の2件が検討され、ともに短期計画に盛り込まれている。

### • 新規観光商品開発の振興強化

#### 1. 地域の新規観光資源目録作成とその価値づけ

\* アントニオ・ライモンディ区のヤルカン（Yarcán）

\* ワリ区のマルカヒルカ（Marcajirca）、ヤナコラル（Llanacorral）、ラパヤン（Rapayán）

\* サン・ニコラス区のヤンゴン（Llangón）

#### 2. カエホン・ア・コンチュコス地域南部（アスンシオン郡、C. F. フィッツカラルド郡、ワリ郡、A.ライモンディ郡）における新規観光ルートの開拓

北部はコロongo、シワス、M. ルスリアガ、ポマバンバの4郡25区24村からなる。その面積は4074.3km<sup>2</sup>で、人口は90275人であり、そのうち有権者数は46811人である。観光政策として、新たな観光産物の創出と振興策の強化として次の6件が検討されており、うち2点が短期計画に盛り込まれている。

### • 観光業の開発

#### 1. 地域観光開発計画

#### 2. 観光インフラ整備

#### 3. 地域の自然や文化の共通認識の確立

#### 4. 観光振興と新規観光商品の開発

#### 5. 観光資源目録作成とそのランキング

#### 6. 上位に評価された自然・文化観光資源の価値づけ

2008年12月に実施したDircetur-Ancash局長アナ・マリア・ヴィジャヌエバへの聞き取り調査では、局長の観光開発に関する基本的方針に関して、持続可能な観光開発にはマイクロでローカルな視点が必要と考えており、少なくとも、区単位での政策立案を理想としているようであった。

局長の出身地でもあるカエホン・ア・コンチュコス地域ではこれまでに様々な活動を実施している。代表的なものでは、MINCETURの協賛によるチャスキとのインカ道を歩くプロジェクト（Felipe 2007）が挙げられる。

局長就任以前から歌手としての活動しており、これまでも同地域のフォルクローレを採り入れた音楽活動を継続している。2009年に地元音楽家との共演ツアーを実施している。

この他、同地域での慈善活動として、2009年1月1日には、ヤイノ遺跡において、子供たちに新年の贈り物として男の子には車を女の子には人形を、ヤイノ遺跡来訪者にはパネトンとホット・チョコレートを振舞っている。しかし、2010年1月には局長職を解任されている。2010年10月3日に県・郡知事選挙が予定されており、ポマバンバ郡にて選挙活動を展開している。

### 3. NGO等による地域観光振興活動

#### (1) IM&クントゥル

山岳研究所(以下、IM)は1972年以降、アメリカ合衆国東部のウェストバージニア州で世界的に顕著で普遍的な価値を持つ山岳環境の保全と活用を目的として組織された国際NGOである。1989年以降、ペルー国内でも活動を開始しており、アンカシュ県都ワラス、ピウラ県都ピウラに事務所を設け、それぞれウワスカラン国立公園の保全活用とペルーエクアドル間のパラモ環境<sup>(註6)</sup>の保全に貢献してきた。IMは1990年代半ばから、地域住民参加による山岳環境の保全と活用を目的としたプロジェクトを実施している。以降、リヤマ・トレック、クントゥルなど地元住民組織との共同プロジェクトを実施してきた。その内容は主に、住民参加型観光開発でありインカ道トレッキングを中心に進められてきた(IM 2000、2004など)。

IMのプロジェクトにおいて、地理的、文化的にも本稿と最も関係があるカエホン・デ・コンチュコス地域南部での活動を取り上げたい。ワリ-ワヌコ・パンバ間のインカ道トレッキングの開発プロジェクトを地元NGOクントゥルと地元住民との協働により2003年から2005年にかけて実施している。プロジェクト終了後の現在でも、同地域において継続されており、高い評価を得ている。現在実施されている、ペルー-エクアドル間のパラモの保全活用を目的としたインカ道トレッキングの開発が進められており、彼らのプロジェクトの評価はペルー文化庁や国際的なドナー機関からも高く評価されている。

#### (2) リヤマ・トレック

2007年に行った聞き取り調査と文献調査によると、1998年以降、ワラスの山岳ガイド(国家資格)ホルヘ・マルテル・アルバラドとレクワイ郡の地元住民14名との協働で開始された。レクワイ-チャピンの考古遺跡間のインカ道トレッキングにアンデスの伝統的な駄獣リヤマを再導入し活用しようというプロジェクトがEUの経済支援のもと実施されてきた。同プロジェクト終了後も、マルテル氏とリヤマ・トレック構成員とにより活動が継続されている。

さらに、リヤマ・トレックはカエホン・デ・コンチュコス地域北部ヤイノ遺跡にて遺跡景観の保全と活用を目的とした住民組織コリ・ヤイノの活動を支援しており、2008年以降コリ・ヤイノ代表であり、シャーマンでもあるマリアノ・ハラミージョ・パウリーノ(Maliano Jaramillo Paulino)にリヤマを6頭移譲しており、サンタ・クルストレッキングのキャンプ地となるヤイノ遺跡周辺での活動を開始している。2010年にはペルー政府の協力のもとさらに20頭販売することが決まっており、今後の発展が期待される。

### (3) 東西カエホン探検隊 (Grupo Kallejon Este O Este)

大谷 (2009) によると、東西カエホン探検隊 (以下、探検隊) は、カエホン・デ・ワイラス地域とカエホン・デ・コンチュコス地域との文化的・社会的・経済的格差の是正や両地域間での交流などを目的に、主に、カエホン・デ・コンチュコス地域北部において2004年以降活動を開始した。

インカ期吊橋プカヤクの復元、チャスキレースの開催、M.ルスリアガ郡リヤマ区におけるインカ道の清掃活動、地域住民の組織化と住民組織間の協力関係の構築などの活動に貢献している。現在では、カエホン・デ・コンチュコス地域での活動に重心が置かれるようになり、主に、地方自治体からの支援を得ることで活動資金を確保している。そのため絶えず地方自治体との交渉を継続する必要がある、人的・経済的不足が認められる。

また、活動内容が多岐にわたりその多くが短期間で終わる点なども問題点として挙げられる。2009年以降、リヤマ区での活動は停滞しており、プカヤクの吊橋第2回目架け替え工事、リヤマ区での清掃活動はペルー文化庁に移譲されている。しかし、第2回目、文化庁により架け替えられた吊橋は、わずか1カ月ほどで壊れており、探検隊常任スタッフはその技術指導能力に問題があると考えているようである。

## Ⅲ カエホン・デ・コンチュコス地域の現況

### 1. 地理的環境

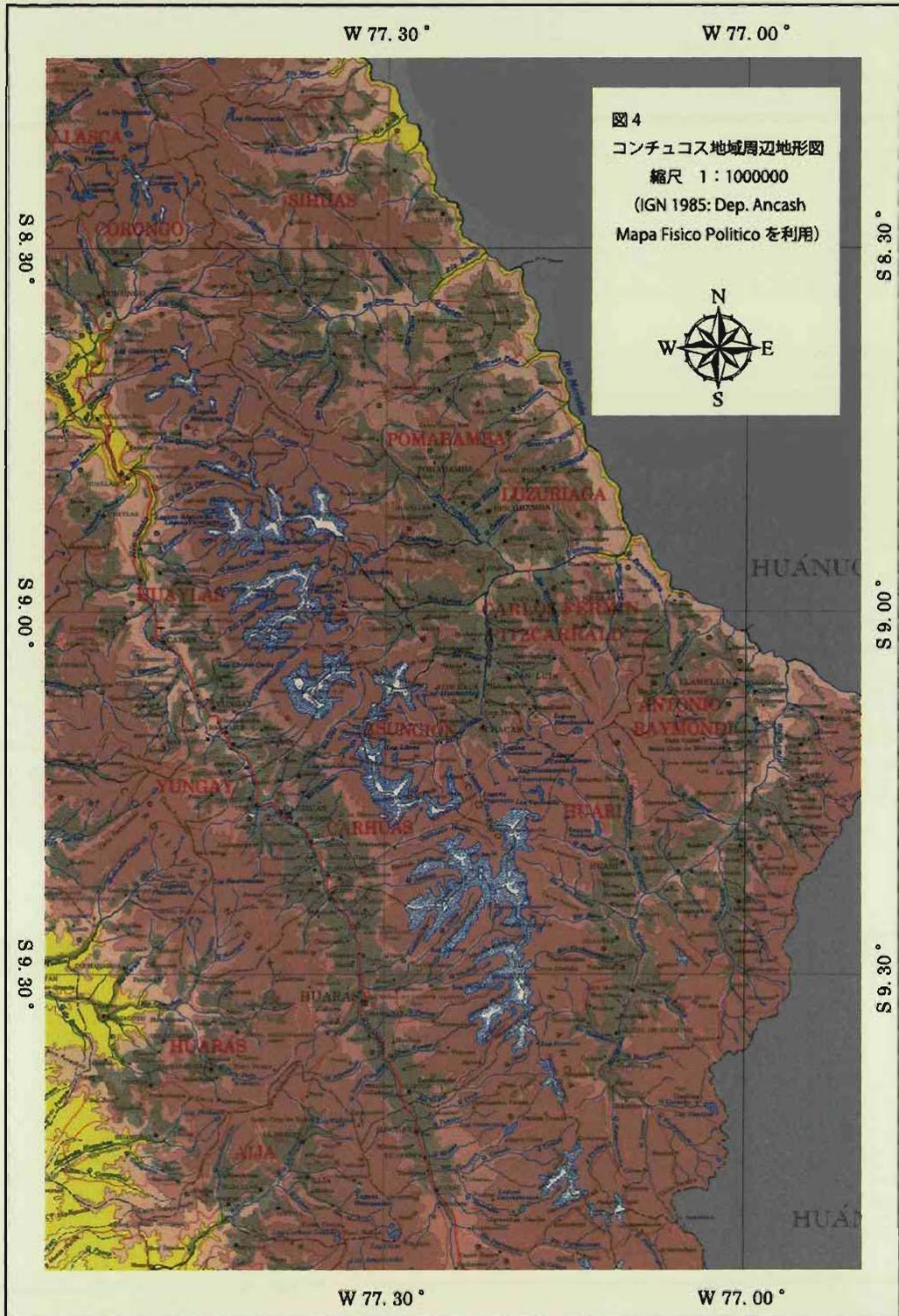
Dircetur-Ancashによると、カエホン・デ・コンチュコス地域は、北はシワス流域から南はチャピン・デ・ワントル区のウチュワイタ (Uchuhuyta) 地域まで、西はコルディエラ・プランカ山群の山腹から東は東山系山群の裾マラニオン流域まで、およそ128500Haに及ぶ (図3、4)。

同地域は、残存状態の良いインカ道が多く報告されている。このインカ道は南北方向に走る幹線道と東西方向に走る支道に分けられる。この幹線道と交差するように西から東へと流れるマラニオン流域の支流がある。主要な水系として南から北にプチカ (Puchca) 水系、ヤナマヨ (Yanamayo) 水系、ルパック (Rupac) 水系が挙げられる。

また、同地域はプーナ、ケチュア、スニ、ユンガの4つの環境帯により形成されている。はじめに、プーナ地帯の草原を形成している沖積土<sup>(註7)</sup>の広範な堆積層、ならびに地帯構造の強いプロセスと浸食作用を経て形成されたが水源となる、カエホン・デ・コンチュコス地域の各流域は分水嶺として機能している。これらの河川は水源から河口に至るまで川幅がとても狭い。これらの河川が、中央山系と並行して流れるポマバンバ (Pomabamba) 流域、ワリ (Huari) 流域などの主要河川に合流している。これら南北方向に流れる河川は細長い盆地 (カエホン) を形成しているため、カエホン・デ・コンチュコス地域はカエホン・デ・コンチュコス盆地と呼ばれている。

このような地形学的特質 (ユンガ、ケチュア、スニ地帯では強い傾斜地や急峻な溪谷により分断され、プーナ地帯では気候と交通アクセスの困難さにより制限) がカエホン・デ・コンチュコス地域内での大規模集落の形成を阻害してきたと考えられる。一般的に本区間では、集住化に強





い影響を及ぼす環境的制約のため人口密度が低い傾向にある。本区間にみられる集住形態は、自然発生的な小規模集落と碁盤目状の区画をもつ比較的規模の大きな集落に大別される。

初めに、自然発生的な小規模集落は、人口が少なく、農畜産業などの第一次産業に従事する人々により形成されており、比較的高度の高い渓谷の上流域に位置する傾向にある。また、医療、教育といった基本的なサービスへの配慮が不十分である。基本的には、小学校の開校に留まっている。小規模集落においては、小学校は教育機関としてだけでなく、医療サービス、社会行事や公共集会の場といった社会機関としても機能している。

次に、碁盤目状の区画をもつ比較的規模の大きな集落はその起源を植民地時代にまで遡ることが多く、スペイン人によるレドゥクシオンとして建設された。現在では、カエホン・デ・コンチュコス地域内で医療、教育、上下水道、電気、通信などの基本的サービスを受けられる唯一の場所である。しかし、これらのサービスの質と範囲は極めて低い水準にある。大規模集落はワリ、ビスコパンバ、ポマパンバといった郡都に限られている。これらの郡都では毎週定期市が開かれており、周辺地域住民のコミュニケーションの場として機能している。

## 2. 歴史的環境

ブレインカ期、インカ期とわけて同地域の先史時代を概観する。コロニアル期以降に関しては資料が不足しており、今後整理していく予定である。編年に関しては、コンチュコス地域での厚い研究成果を持つエレラ (2005) を参考している (表4)。

表4 中央アンデス文明史編年表

時代区分	略号	絶対年代		
前期先土器時代	EPC	9500-3000BC	狩猟採集／植物栽培・動物飼育の開始	ギタレーロ
後期先土器時代	LPC	3000-1800BC	海岸部における河谷内ネットワーク形成の開始／神殿建設の開始／漁労の発達・織物製作	ラウリコチャ
草創期	IP	1800-900BC	海岸部における河谷間ネットワーク形成の開始／土器製作	ラ・パンバ
前期ホライズン	EH	900BC-AD1	汎アンデス宗教ネットワークの形成 (チャビン) / 交易ネットワークの形成 / 神殿の発達 / 冶金技術の発達	チャビン・デ・ワンタル
前期中間期	EIP	AD1-650	広域社会・政治・宗教ネットワークの形成 / 王国の成立 / 青銅器製作	ヤイノ
中期ホライズン	MH	AD650-1000	都市の成立	ウィルカワイン
後期中間期	LIP	AD1000-1476		
後期ホライズン	LH	AD1476-1532	インカ帝国による全中央アンデスの政治統一	ワリタンボラ・パンバ
植民地時代	COR	AD1532-1821	スペイン人の侵入・征服	
共和国時代	REP	AD1821-		

### (1) プレインカ期

同地域では、草創期から活動の痕跡が残されている。日本人調査団により発掘調査が行われた、ラ・パンパ遺跡では中部海岸で最初の土器とされる薄手土器が出土している。

続く、前期ホライズンでは、世界遺産にも登録されているチャビン・デ・ワンタル遺跡が知られている。チャビン・デ・ワンタル遺跡周辺を除くと、近年では、エレーラやオルシニらによりヤナマヨ流域からチャカスにかけての地域で調査が報告されている (Herrera 2003, Orsini 2003, Bebel Ibarra 2003)。草創期で挙げられたラ・パンパ遺跡でも利用が継続されており、チャビン様式の土器が出土しており、方形半地下式広場やそれに面した基壇の後がみられ、大神殿遺構の可能性が指摘されている。

前期中間期では、チンチャワス様式と呼ばれる土器様式が知られている。北はチャカス流域から南はプチカ流域まで、西はチンチャワス (Chinchawas) ケイヤッシュ・アルト (Queyash Alto)、現在のカエホン・デ・コンチュコス地域中央域からカエホン・デ・ワイラス地域の海拔2500m~3800mにかけて分布している (Lau 2003, Wegner 2003)。さらに、セトルメント・パターンに変化がみられ、切り立った高所に建設されるようになる。つまり、領域支配を意図した立地選択や城塞的性格をもつ遺跡が増加する。さらに、遺跡の機能分化が認められるようになり、集落遺跡、公共遺跡、祭祀遺跡、城塞などが先行する調査研究により報告されている (Herrera 2005)。代表的な遺跡としてヤイノ遺跡が挙げられる。

次の中期ホライズンでは、エルナン・アマット (1967, 1969) やベベル・イバラ (2003) による調査では、プチカ流域に多く残るレクワイ様式の土器から同流域では、前期中間期から次の中期ホライズンにかけての連続性が指摘されている。ただ、カエホン・デ・コンチュコス地域北部域では連続性が確認されていない。

後期中間期では、プチカ・ヤナマヨ流域において利用が継続している。この時期の遺跡は、宗教的、軍事的要素の強いものが多く報告されている。インカ帝国の到来とともに後期ホライズンを迎えるようである (Herrera 2003, Bebel Ibarra 2003, Alex Mantha 2005)。

どうもこれまでの調査者や研究成果では、ヤナマヨ流域以北、カエホン・デ・コンチュコス地域北部域での詳細な報告例が少ないようである。

### (2) インカ期

カエホン・デ・コンチュコス地域はかなり早い段階でインカ帝国に組み込まれたようである。インカ帝国到来以前に、カエホン・デ・コンチュコス地域周辺では複数の民族集団の存在が指摘されている (Herrera 2005)。東側にあたる海岸部ではチムー帝国、カエホン・デ・ワイラス地域ではワイラスが、西側アマゾン東斜面ではワラチュコが、北はマルカ・ワマチュコ遺跡に代表されるワマチュコ、南はピンコと呼ばれる民族集団がクロニカなどに取り上げられている。アンデスの歴史学者・考古学者によるインカ帝国の討論会によると第9代王インカ、パチャクティにより1470年代にはインカ帝国に組み込まれたようである。



表5 ワリ郡2003年人口統計 (INEI 2004; 127)

郡名・区名	郡都・区都	標高 m	面積 Km <sup>2</sup>	人口	人口密度 人/Km <sup>2</sup>
<i>Huari</i>	<i>Huari</i>		2 771.90	69 107	24.9
Huari	Huari	3149	398.91	9 630	24.1
Anra	Anra	3172	80.31	2 465	30.7
Cajay	Cajay	3050	159.35	4 247	26.7
Chavin de Huantar	Chavin de Huantar	3137	434.13	10 066	23.2
Huacachi	Huacachi	3509	86.70	2 919	33.7
Huacchis	Huacchis	3491	72.16	2 344	32.5
Huachis	Huachis	3268	153.89	4 478	29.1
Huantar	Huantar	3354	156.15	3 298	21.1
Masin	Masin	2550	75.33	2 763	36.7
Paucas	Paucas	3421	135.31	2 847	21.0
Pontó	Pontó	3140	118.29	3 947	33.4
Rahuapampa	Rahuapampa	2550	9.02	722	80.0
Rapayán	Rapayán	3238	143.34	1 982	13.8
San Marcos	San Marcos	2964	556.75	12 552	22.5
San P. de Chaná	Chaná	3413	138.65	2 706	19.5
Uco	Uco	3336	53.61	2 141	39.9

コ県に接し、南はアントニオ・ライモンディ郡とワリ郡に、西は北からユンガイ (Yungay) 郡とアスンシオン (Asunción) 郡に隣接している (図6、表6)。サン・ルイス、サン・ニコラス、ヤウヤの3区からなる。その面積は624.25km<sup>2</sup>で、人口は22761人である (INEI 2006)。郡都はサン・ルイスで、海拔3131メートルに位置する。

郡都サン・ルイスでは、公衆電話、インターネット、ATM、薬局、病院、雑貨店、水道、電気が整備されている。さらに、観光シーズンには観光ポリスが設置されている。

2009年の聞き取り調査によると、同郡行政府とサン・ルイス市観光案内所によりインカ道を含む観光資源調査が実施されているようである。残念ながら、その調査に関連する報告書などの資料は入手できておらず、追加調査が必要である。

### (3) M. ルスリアガ郡 (Prov. Mariscal Luzuriaga)

同郡は、アンカッシュ県の東側中央部、山岳地帯に位置し、北はポマバンバ郡、東はワヌコ県に接し、南は西からユンガイ郡とC.F.フィツカラルド郡に隣接している (図7、表7)。ピスコバンバ、カスカ、エレアサル・グスマン、パロン、フィデル・オリヴァス・エスクアロ、リヤマ、ユンバ、ルクマ、ムスガの8区からなる。その面積は730.58km<sup>2</sup>で、人口は28091人である (INEI 2006)。郡都はピスコバンバ市で、海拔3281メートルに位置する。

郡都ピスコバンバでは、公衆電話、インターネット、薬局、病院、雑貨店、水道、電気が整備

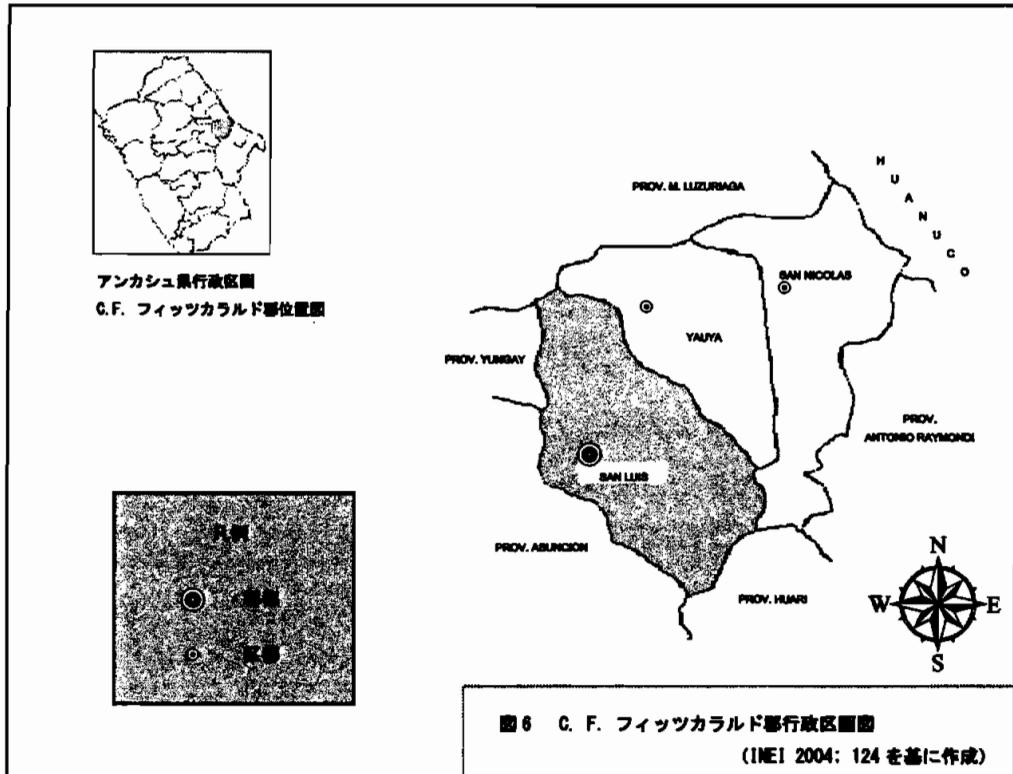


表6 C. F. フィッツカラルド郡2003年人口統計 (INEI 2004; 124)

郡名・区名	郡都・区都	標高 m	面積 Km <sup>2</sup>	人口 (2003)	人口密度 人/Km <sup>2</sup>
<i>C. F. Fitzcarrald</i>	<i>San Luis</i>		624.25	22 761	36.5
San Luis	San Luis	3131	256.45	12 575	49.0
San Nicolás	San Nicolás	2875	197.39	5 000	25.3
Yauya	Yauya	3250	170.41	5 186	30.4

されている。しかし、観光資源が把握されておらず多くの文化遺産が開発により破壊されている。郡政府としての文化政策や観光振興に対する配分は低いようである。

(4) ポマバンバ郡 (Prov. Pomabamba)

同郡は、アンカッシュ県の東側北部、山岳地帯に位置し、北はシワス (Sihuas) 郡とラ・リベルタ県、東はワヌコ県に接し、南は西からユンガイ郡とM.ルスリアガ郡に、西はワイラス郡に隣接している (図8、表8)。ポマバンバ、ワイジャン、パロバンバ、キヌアバンバの4区からなる。その面積は914.05km<sup>2</sup>で、人口は28296人である (INEI 2006)。郡都はポマバンバ市で、海拔3185メートルに位置する。

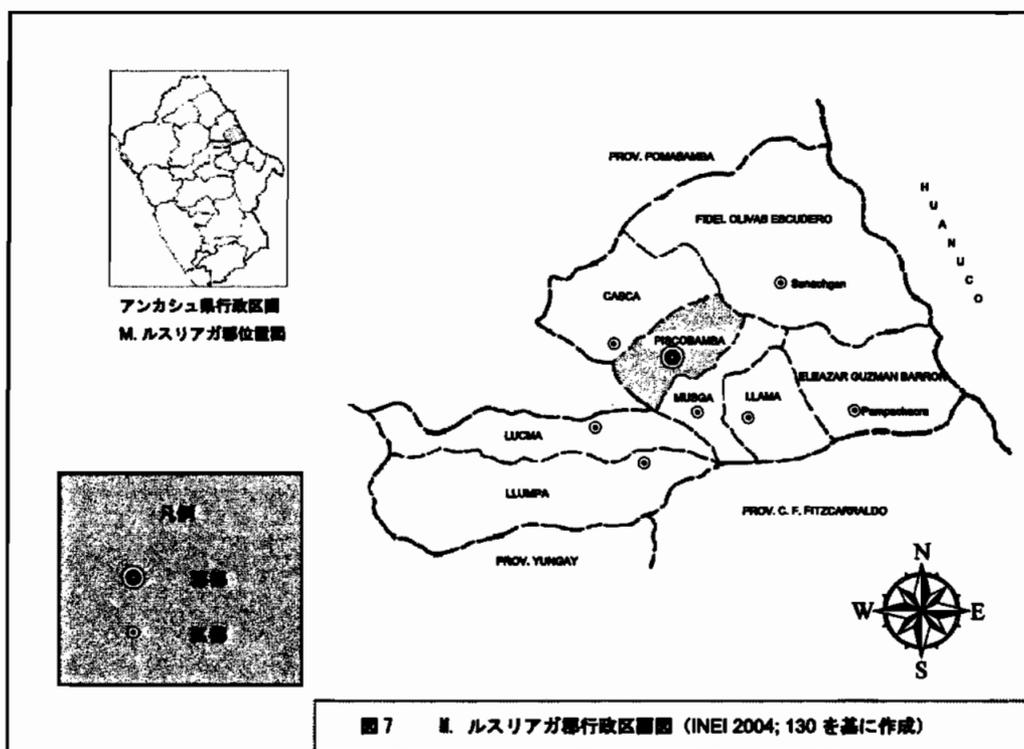


表7 M. ルスリアガ郡2003年人口統計 (INEI 2004; 130)

郡名・区名	郡都・区都	標高 m	面積 Km <sup>2</sup>	人口 (2003)	人口密度 人/Km <sup>2</sup>
<i>Mcal. Luzuriaga</i>	<i>Piscobamba</i>		730.58	28 091	38.5
Piscobamba	Piscobamba	3281	45.93	4 167	90.7
Casca	Casca	3132	77.38	5 348	69.1
Eleazar Guzman Barrón	Pampachacra	2950	93.96	1 528	16.3
Fidel Olivas Escudero	Sanachgán	2650	204.82	2 757	13.5
Llama	Llama	2821	48.13	2 039	42.4
Llumpa	Llumpa	3200	143.27	6 822	47.6
Lucma	Lucma	3083	77.37	3 891	50.3
Musga	Musga	2970	39.72	1 539	38.7

郡都ポマバンバでは、公衆電話、インターネット、ATM、薬局、病院、雑貨店、水道、電気、観光ポリスが整備されている。2010年現在、温泉周辺での開発が継続されているがその歩みは極めて遅い。またペルー政府による観光資源からは漏れており、今後の政策が不明瞭である。

(5) シワス郡 (Prov. Sihuas)

同郡は、アンカッシュ県の東側北部、山岳地帯に位置し、北はパジャスカ (Pallasca) 郡、東

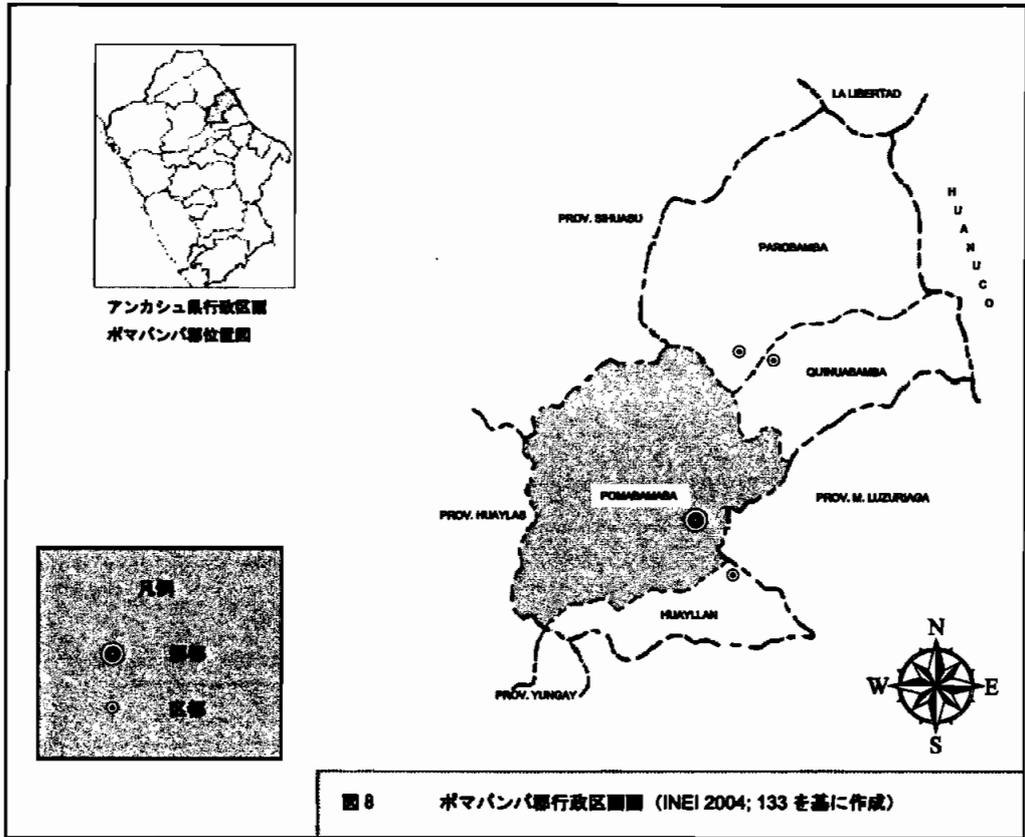


表8 ポマバンバ郡2003年人口統計 (INEI 2004; 133)

郡名・区名	郡都・区都	標高 m	面積 Km <sup>2</sup>	人口 (2003)	人口密度 人/Km <sup>2</sup>
<i>Pomabamba</i>	<i>Pomabamba</i>		914.05	28 296	31.0
Pomabamba	Pomabamba	2948	347.92	14 139	40.6
Huayllán	Huayllán	3000	88.97	4 080	45.9
Parobamba	Parobamba	3185	331.10	7 209	21.8
Quinuabamba	Quinuabamba	3108	146.06	2 868	19.6

はワヌコ県に接し、南は西からワイラス郡とポマバンバ郡に、西はコロongo郡に隣接している (図9、表9)。シ瓦斯、アコバンバ、アルフォンソ・ウガルテ、カシャバンバ、チンガルボ、ワイジャバンバ、キイチェス、ラガシユ、サン・フアン、シクシバンバの10区からなる。その面積は914.05km<sup>2</sup>で、人口は28296人である (INEI 2006)。郡都はシ瓦斯市で、海拔3185メートルに位置する。

郡都シ瓦斯では、公衆電話、インターネット、薬局、病院、雑貨店、水道、電気、観光ポリスが整備されている。

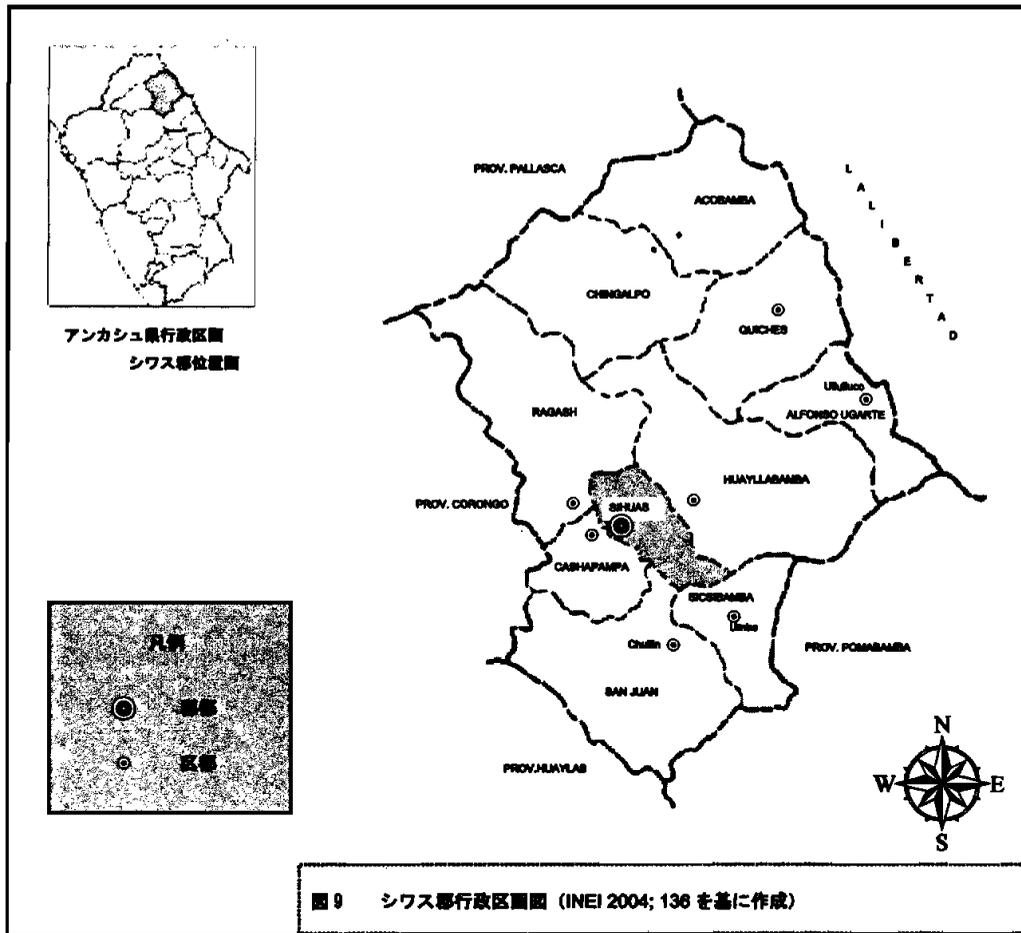


表9 シワス郡2003年人口統計 (INEI 2004; 136)

郡名・区名	郡都・区都	標高 m	面積 Km <sup>2</sup>	人口 (2003)	人口密度 人/Km <sup>2</sup>
<i>Sihuas</i>	<i>Sihuas</i>		1 455.97	36 501	25.1
Sihuas	Sihuas	2716	43.81	6 275	143.2
Acobamba	Acobamba	3140	153.04	2 170	14.2
Alfonso Ugarte	Ullulluco	3205	80.71	1 233	15.3
Cashapampa	Cashapampa	3425	66.96	3 872	57.8
Chingalpo	Chingalpo	3128	173.20	1 527	8.8
Huayllabamba	Huayllabamba	3318	287.58	4 970	17.3
Quiches	Quiches	3012	146.98	3 121	21.2
Ragash	Ragash	3500	208.45	3 557	17.1
San Juan	Chullfn	2725	209.24	7 481	35.8
Sicshibamba	Umbe	3120	86.00	2 295	26.7

#### 4. 産業

カエホン・デ・コンチュコス地域では、農牧業といった第一次産業を中心とした景観が広がっている。農業は地域経済の根幹を成しており、農作物は主に世帯内で消費される。わずかな余剰生産物は市で現金化する。農業形態は主に非灌漑農業であり、海拔2500mから3700mで営まれている。牧畜業はイチユ（学名Stipa ichu）が自生する海拔3800m以上のプーナ地帯で主に営まれる。基本的には草原地帯である。農作物と異なり、畜産物は市での現金化もしくは地域内での消費に割り当てられている。さまざまな条件下で、畜産業は地域住民の唯一の現金収入の手段である。

二次産業としては、カエホン・デ・コンチュコス地域中部域、ワリ郡、サン・マルコス区のアンタミナ鉱山会社（Compañía Minera Antamina）により所有、操業されるペルー最大の生産量をもつ銅亜鉛鉱山（海拔4200m）が挙げられる。アンタミナ鉱山は2001年から操業が開始されており、その鉱廃水はプチカ流域へと排出されており、下流域への水質汚濁が懸念されている。

第三次産業（商業活動）は盛んではない。基本的には、アンカシュ県都ワラスもしくは海岸部から購入している。カエホン・デ・コンチュコス地域南部域に属するワリでは首都リマから、中部域に属するピスコバンバ、ポマバンバではアンカシュ県都チンボテから商品を購入している。カエホン・デ・コンチュコス地域では、多くの住民が商品の購入や現金収入や基本的サービスの享受を求めており、都市部への人口流出が問題となっている。

#### 5. 交通機能

##### (1) アクセス

カエホン・デ・コンチュコス地域へは長距離バスを利用する。首都リマ、アンカシュ県都ワラスから毎日運航している。

はじめに、リマからカエホン・デ・コンチュコス地域行きは数社が毎日運行している。しかしながら、その所要時間約20時間弱と極めて長く、車内設備や、シートタイプは各社とも大きな差はなく、トイレなしの大型バスに近い形態である。各社とも、長距離バスと同時に運搬業も取り行っている。その路線は、リマ～チャピン・デ・ワントル～サン・マルコス～ワリ～サン・ルイス～ピスコバンバ～ポマバンバである。

次に、リマからワラスへ飛行機か長距離バスで移動し、その後ワラスからカエホン・デ・コンチュコス地域へと移動するルートがある。リマからワラスへは地球の歩き方など複数のガイドブックに掲載されているためここでは省略する。

ワラスからカエホン・デ・コンチュコス地域行きは1日に1～2便、以下の3路線が運行されている。車内設備や、シートタイプは各社とも大きな違いはない。

##### 1. ワラス～カタック～チャピン～サン・マルコス～ワリ（4時間、約15s/）

サンドバル（Sandoval）社、リオ・モスナ（Río Mosna）社、チャピン・エクスプレス（Chavín Express）社の3社。

##### 2. ワラス～カルワス～チャカス～サン・ルイス（6時間、20s/）

レンソ（Renzo）社、エル・ヴェルソ（El Verzo）社の2社。

## 3. ワラス～カルワス～ヤナマ～ピスコパンバ～ポマパンバ（8時間、25s/.)

レンソ（Renzo）社、エル・ヴェルソ社、ロス・アンデス（Los Andes）社の3社。

(2) 道路網と交通事情<sup>(註8)</sup>

現在、カエホン・デ・コンチュコス地域の交通網（図10）はINCにより次の3階層に分けられる（INC 2006a；64-66）。第1に、ブランカ山群を横断してカエホン・デ・コンチュコス地域への地域間道路（車道、基本的には未舗装）として、カエホン・デ・ワイラス盆地ならびにチンボテ市、首都リマなどの海岸部からのルートがある。ペルー国もしくはアンカシュ県により建設される。現在では、海岸部や都市部との関係性が重視されるため、主要ルートが東西方向に軸をもつ傾向が強い。以下では、南から北に各流域に沿ったルートを挙げる。

はじめに、プチカ流域沿いのルートは、カタック（Catac）～チャビン（Chavín）～サン・マルコス～ワリ（Huari）である。

次に、ヤナマヨ（Yanamayo）流域沿いのルートは、アシュノカンチャ（Ashnocancha）流域沿いに南下するルート（ワラス～カルワス～チャカス～サン・ルイス）とポマパンバ流域沿いに北上するルート（ワラス～カルワス～ヤナマ～ピスコパンバ～ポマパンバ）とがある。

現在では、同地域を南北に移動するためのルートも建設されており、南から順にチャビン～サン・マルコス～ワリ～サン・ルイス～ピスコパンバ～ポマパンバ～シワス/コロongoと北に縦走している。

すべてのルートは舗装されておらず、例外的にカタック～チャビン・デ・ワタル間ならびに海岸部へとつながるルートのみコンクリートなどで舗装されている。同ルートは世界遺産であるチャビン・デ・ワタルへの観光バスの路線としても機能しており、観光振興の一環として2009年に再整備された。

第2に、地域内道路（車道、未舗装）は商品の流通ルートとして機能しており、郡や区の行政府により建設される。路面状態は悪く、普通貨物自動車を対象とした道路である。この他、コンビと呼ばれるワンボックスタイプの乗り合いバンやコレクティボと呼ばれる乗り合いタクシーなどの交通路としても利用されており、地域社会の生活利便性にとって欠くことのできない道路である。しかし、土木施工管理技士（Ingeniero Civil）による不要な道路建設による土砂崩れなどの弊害も認められる点を併記しておく必要がある。

第3に、歩行者道として山道があげられる。山道にはインカ道などの古道も含まれている。インカ道などの例外を除くと耕作地や近隣集落など生活圏内の移動に利用される日常の生活路として機能している。このインカ道はカエホン・デ・コンチュコス地域の主要な流域を横断する唯一のルートである。先スペイン期には、主要ルートは南北方向に軸をもっており、その道筋は西から東（海岸部からアンデス高地へ）へと向かう現在の交通網ときわめて対照的である。

インカ道の重要性として、先スペイン時代だけでなく、植民地時代、共和国時代を通じて材木や小麦、ジャガイモ、畜産物などの運搬経路として利用されており、高く評価されている。車両通行を目的とした道路建設はアンデス高地（例えば、カエホン・デ・コンチュコス地域）への海岸部の影響力を強化しており、ワラスやチンボテ、リマといった都市部への人口流出や、地域内



での協働を阻害するなど、様々な悪影響を与えている。

現在、一部区間を除き、インカ道の地域住民による利用は減少傾向にある。タンポ・デ・ワンカバンバ～ヤウヤ間は、以前から耕作地への移動ルートとして地域住民により利用されている。

ヤウヤ～プカヤクの吊橋～リヤマ間は、現在、両区行政政府によるインカ期の吊橋の復元・架け替えが行われており、同区間の利用は増加傾向にある。また、リヤマ～アゴ・クルス間は以前からの利用が継続している。2007年以降リヤマ区住民によるインカ道を含む山道の清掃活動が実施されており、同区間の利用は増加傾向にある。以上の変化は、本調査区で2004年から活動している住民組織KEOに依るところが大きい。

#### Ⅳ カエホン・デ・コンチュコス地域の観光資源

##### 1. 観光資源の分類について

はじめに、観光資源の分類に関してふれる必要がある。溝尾（2008）は観光学における資源分類を行っている。資源を成因から分けており、人間による創造の有無で、人文資源と自然資源とに大別している。また、これまで細分していた人文資源に関して、評価が困難な資源が多いため、新・旧による分類を廃止している。さらに、観光地形成に必要な資源とレクリエーション資源とを除いており、最も核となる部分だけにし、テーマに応じて他の資源や要因を付加していけばよいと述べている。

本稿は世界遺産登録を目的としたインカ道をテーマとしており、人文資源を文化資源と改め、自然資源は変更せずに用いることとする。また、文化資源の構成要素を一部改編してある（表10）。さらに、ペルー観光では温泉が評価されており、本稿では、レクリエーション資源として取り扱うことにする。

表10 本稿で用いる観光資源分類

自然資源			文化資源	
1. 山岳	6. 峡谷	11. 島嶼	1. 考古遺跡	6. 碑・像
2. 高原	7. 滝	12. 岩石・洞窟	2. 歴史地区	7. 建造物
3. 原野	8. 河川	13. 動物・植物	3. 教会	8. 観覧施設
4. 湿原	9. 海岸	14. 自然現象	4. 庭園・公園	9. 文化的景観
5. 湖沼	10. 岬		5. 年中行事	
レクリエーション資源			1. 温泉	

##### 2. ワリ郡に所在する観光資源

表11はワリ郡に所在する観光資源を示したものである。同郡はRegion-Ancash（2008b）によりコンチュコス南部に分類されている。表に示される資源は29点ときわめて多い。加えて、その中には1985年に世界遺産登録されたチャビンの考古遺跡が含まれている。2009年度はその来客数を減じているものの外国人観光客7567人、国内観光客39052人ときわめて多くアンカシュ県の主要な観光地として機能している<sup>(注9)</sup>。これに加え、ワリ市、チャビン村には観光案内所が設けら

表11 (1) ワリ郡観光資源一覽 (INEI2004 ; 221, 235)

区	資源名	所在地	種別
ワリ Huari	ロス・ピンコス遺跡 Restos Arq. Los Pincos プルワイ湖 Laguna de Purhuay  Feria agropecuaria y artesanal de Huari		文化 考古遺跡 自然 湖沼 文化 年中行事 10月7～12日
アンラ Anra	プロモ・ヒルカ Plomo Jirca ヤパック Papac	アルカヤン Alcayan カスカイ Cascay	未確認  未確認
カハイ Cajay	マルカヒルカ遺跡 Marca Jirca レパレン Reparen ワリ・タンボ遺跡 Restos Arq. Huari Tambo インカ道 Camino Inca	チンチャス Chinchas カヤス Cayas ワリ・タンボ Huari Tambo	文化 考古遺跡 未確認  文化 考古遺跡 文化 文化的景観
チャビン・デ・ワンタル Chavín de Huantar	チャビン考古地区 Restos Arq. de Chavín チャビン国立博物館  ワッツアン氷河 Nevados de Huatzan 温泉 Aguas Termales カニン湖 Lagunas Canin ミラドール・プトコル Mirador Putcor  Feria artesanal y comercial "Virgen del Cármén"Chavín	ケロコス Qerocos ウチュワイタ Uchuhuayta プトコル Putcor	文化 考古遺跡 文化 観覧施設 自然 山岳 レクリエーション 温泉 自然 湖沼 未確認  文化 年中行事

表11 (2) ワリ郡観光資源一覧 (INEI2004 ; 221, 235)

区	資源名	所在地	種別
チャビン・デ・ワントル Chavín de Huantar	カパック・ライミ Qhapaq Raymi	チャビン・デ・ワントル Chavín de Huantar	文化 年中行事 12月21日
ワチカ Huacachi	マチャイ教会 Iglesia de Machay チンチ Chinchi ナウパマルカ Naupamarca ヤパックマルカ Yapacmarca	ワカチ ワカチ ワカチ ワカチ	文化 教会 未確認 未確認 未確認
マシ Mashin	マルカヒルカ Marcajirca ガントウ Gantu	ワリパンパ Huaripampa チワン Chihuan	未確認 未確認
パウカス Paucas	パウカス Paucas	パウカス Paucas	未確認
ラワパンパ Rahuapampa	シュクシュラガ Shucushuraga ワシュゴ Huashgo カントウマルカ Cantumarka ポルベニヒルカ Porvenijirca	ラパイアン Rapayan ラパイアン Rapayan ラパイアン Rapayan ラパイアン Rapayan	未確認 未確認 未確認 未確認
ウコ Uco	カスティーヨ・ピエッホ Castillo Viejo	ウコ Uco	文化 考古遺跡

れており同地域においては観光先進地である。

チャビン考古遺跡を利用した年中行事を2007年から催している。これはチャビン・デ・ワントル行政府により運営されており、毎年12月21日にチャビン・デ・ワントル村からチャビン考古遺跡まで仮装行列が練り歩き、同遺跡にて、カパック・ライミと呼ばれるインカ時代の祝祭を執り行う。この日に関しては地元住民の遺跡内入場料が免除されており、地域住民への文化・観光資源の還元という意味でも重要な役割を果たしている。

### 3. C. F. フィッツカラルド郡に所在する観光資源

表12はC. F. フィッツカラルド郡に所在する観光資源を示したものである。同郡はRegion-Ancash (2008b) によりコンチュコス南部に分類されている。表に示される資源は6点である。ヤイノ区を通るインカ道は残存状態がよく、沿道の関連遺跡も多く残っており、2010年現在トレッキングを目的とした外国人観光客が増加している。

表12 C. F. フィッツカラルド郡観光資源一覧 (INEI2004 ; 221)

区	資源名	所在地	種別
サン・ルイス San Luis	カシャヒルカ	ゴンツァヒルカ	未確認
	Cashajirca	Gontzajirca	
	インカ道	カニナコーランラカンチャ	文化
	Camino Inca		文化的景観
サン・ニコラス San Nicolas	ポトシ	サン・ルイス	未確認
	Potosi		
	温泉		レクリエーション
ヤウヤ Yauya	Baños Termales		温泉
	インカ・ラハ	パンパカンチャ	未確認
	Inca Raja	Pampacancha	
	インカ道	タンボ	文化
	Camino Inca	Tambo	文化的景観

### 5. M. ルスリアガ郡

表13はM. ルスリアガ郡に所在する観光資源を示したものである。同郡はRegion-Ancash (2008b) によりコンチュコス北部に分類されている。表に示される資源は2点ときわめて少ない。郡都ビスコパンバ市はクロニカにも取り上げられることが多くインカ期から歴史が確認されている。その長い歴史をもつものの、現在、観光資源としての保全・活用よりも、道路開発やサッカー場の建設などに関心が高いようである。そのため、現在のところ観光資源はあまり報告されていないのが現状である。ルクマ区キシユアルに所在するウィクロコチャ遺跡が報告されるにとどまっている。

しかし、2004年から東西カエホン探検隊により、様々な地域観光振興活動が実施されており、

表13 M. ルスリアガ郡観光資源一覧 (INEI2004 ; 221)

区	資源名	所在地	種別
リヤマ Llama	ブカヤクの吊橋	ブカヤク	文化
	Puente Colgante Pukayacu	Pukayacu	考古遺跡
ルクマ Anra	ウィクロコチャ	キシユアル	文化
	Wicrococha	Quishar	考古遺跡

インカ時代の吊橋を復元し、インカ道の保全清掃活動を継続している。今後の、観光資源・ルートの登録、開発が期待される。

## 6. ポマバンバ郡

表14はポマバンバ郡に所在する観光資源を示したものである。同郡はRegion-Ancash (2008b)

表14 ポマバンバ郡観光資源一覧 (INEI2004 ; 222, 235)

区	資源名	所在地	種別
ポマバンバ Pomabamba	ハンカ・パンパ Janca Pampa サフナ Sajuna 温泉 Aguas Termales インカ道 Camino Inca  Feria agropecuaria, artesanal y comercial San Juan	ハンカ・パンパ Junca Pampa ガチュナ Gachuna ポマバンバ Pomabamba	文化 考古遺跡 自然 湖沼 レクリエーション 温泉 文化 文化的景観 文化 年中行事 6月25～30日
ワイジャン Huayllan	ヤイノ考古地区 Restos Arq. Yaino カルワイ Carhuay ベントナ考古地区 Restos Arq. Ventana	ワンチャクバンバ Huanchacbamba ティンヤッシュ Tinyash ワイジャン Huayllan	文化 考古遺跡 文化 考古遺跡 文化 考古遺跡
パロバンバ Parobamba	ワヨ Huayo ケロプンタ Queropunta トレス・チュルパス Tres Tullpas	オコボン  ラッハラッハ Rajraj ワンチャイーヨ Huanchayllo	未確認  未確認 文化 考古遺跡
キヌアバンバ Quinuabamba	ユラッハ・パドレ Yuraj Padre シュマイ・ベルガ Shumay Perga プエプロ・ピエッホ遺跡 Restos Arq. Pueblo Viejo	キヌアバンバ Quinuabamba キヌアバンバ Quinuabamba キヌアバンバ Quinuabamba	未確認  未確認 文化 考古遺跡

によりコンチュコス北部に分類されている。表に示される資源は14点である。ワイジャン区には多くの遺跡が残っており、代表的なものではヤイノ遺跡が挙げられる。ヤイノ遺跡はサンタ・クルストレッキングのキャンプ地としても利用されており、ヤイノ遺跡からコンチュコス地域北部への新規観光ルートの開発が必要とされている。

祭り・イベント資源として、感謝祭 (Feria agropecuaria, artesanal y comercial San Juan) がある。この祭りは、郡行政府により運営されており、例年6月25～30日にかけて実施されている (INEI2004:235)。主に、リマ、ワラス、海岸部の大都市などへ移住した世帯やポマバンバ市周辺の地域住民が主な観光客の対象となっている。正確な観光客数は不明であるが、ポマバンバ郡行政府職員やKEOの常任スタッフらへの聞き取り調査では3000～4000人とされている。

### 7. シワス郡

表15はシワス9区に所在する観光資源を示したものである。同郡はRegion Ancashによりコンチュコス北部に分類されている。表に示される資源は9点である。シワス郡を通りカハマルカへ抜けるインカ道は残存状態も良く、今後の新規観光ルートとして期待できる。

表15 シワス郡観光資源一覧 (INEI2004 ; 222, 235)

区	資源名	所在地	種別
シワス Sihuas	温泉 Aguas Termales	シワス Sihuas	レクリエーション 温泉
	インカ道 Camino Inca		文化 文化的景観
	Feria agropecuaria y artesanal de Sihuas	シワス Sihuas	文化 年中行事 8月5～8日
カシャパンパ Cashapampa	ゴブチョ Gopcho	パサカンチャ Pasacancha	未確認
	プエブラソン Pueblason	カシャパンパ Cashapampa	未確認
	チンガルポ Chingalpo	チンガルポ Chingalpo	未確認
ラガッシュ Ragash	カラングイ湖 Laguna de Carangay		自然 湖沼
シクシバンバ	ワイアッシュ Huayash	ウンベ Umbe	未確認
	トレ・ヒルカ Torre Jirca	バルコン Balcón	未確認

祭り・イベント資源として、(Feria agropecuaria y artesanal de Shiuas) がある。この祭りはシワス郡行政府と (Agencia Agraria) により、例年 8 月 5～8 日にかけてシワス市内で行われている (INEI2004:235)。

## V カエホン・デ・コンチュコス地域における地域観光振興の課題

同地域では、地理的要因によりヤナマヨ流域の北部と南部の間で政治的、社会的、経済的、文化的格差が認められる。これらの格差是正のためにも、インカ道トレッキングなどインカ帝国以前に利用されてきた南北軸の交通網を新規観光ルートとして開発する必要がある。Region-Ancashにおいても新規観光資源・ルートの開発の必要性が指摘されている。しかし、北部と南部での観光インフラ整備、ならびに観光資源の把握開発の格差がおおきいため、その観光政策の立案は北部と南部とにわけている。どのような形で南北間の地域的統合を進めていくかは今後の課題である。

### 注

- (注1) ガルシア政権は、特に貧困層や低所得者層が多いとされる山岳部において、優遇税措置の導入等によって、農業・農産物加工業を中心とした輸出振興 (通商、「Sierra Exportadora」) を図る方針である。
- (注2) ガルシア政権はプーノに自由区を創設し、同地域を通る幹線道路を活用してのブラジルへの輸出拡大を図る計画を打ち出している。
- (注3) 内陸部の魚介類冷凍・保存設備の整備、製造産業地域の水道整備、観光振興策の策定を行う方針である。
- (注4) 優遇税制により、水道、道路及び電力インフラなどの整備を促進する計画である。
- (注5) 2008年4月にペルー国リマ市にて開催された「APEC第5回観光大臣会合」では責任ある観光を広めるために取り組むべき主な事項として、以下の4点をテーマに議論され、同宣言が採択された。
- ・環境、社会および文化への悪影響の最小化
  - ・地元住民の参加
  - ・自然遺産および文化遺産の保全の保全と世界の多様性の維持への積極的な貢献
  - ・観光客と受入側が相互に配慮し、尊重する文化の発展
- (注6) パラモとはアンデス山脈北部から中央部にかけて多くみられ、標高3500～4500mに位置する荒涼とした高原を意味する。年間平均気温3～10℃という厳しい気候条件である。濃霧が発生し浸潤ではあるが、気温が低く日照時間が不定期なため、農耕には不適である。そのため、牛、羊、山羊などが飼育されている。
- (注7) 河川が運搬して漸次沈積して生じた土壌のこと。
- (注8) [http://www.mtc.gob.pe/portal/transportes/red\\_vial/dptos/Ancash\\_3v.pdf](http://www.mtc.gob.pe/portal/transportes/red_vial/dptos/Ancash_3v.pdf) (2010年8月15日)
- (注9) チャビン考古遺跡来訪者数[http://www.mincetur.gob.pe/newweb/portals/0/turismo/sitios%20turisticos/Anc\\_CHAVIN\\_Lleg\\_Nac\\_Extr.pdf](http://www.mincetur.gob.pe/newweb/portals/0/turismo/sitios%20turisticos/Anc_CHAVIN_Lleg_Nac_Extr.pdf) (2010年8月28日)

参考文献

細野健二

2007年、ペルー経済の動向とガルシア新政権の政策課題、開発金融研究所報第34号、pp. 79-97

運輸政策研究機構

2006年、「ペルー共和国運輸事情概要」

<http://www.jterc.or.jp/koku/shyokoku/02PDF/peru.pdf> (2010年 8月14日)

大谷博則

2009年、「住民参加によるインカ道の保全と活用」日本ペルー民族学研究50周年フォーラム

国際開発センター

1996年、「運輸経済協力調査 (ペルー)」

国際観光開発研究センター

1994年、「海外観光情報収集調査ペルー共和国報告書」

国際協力事業

1997年、「ペルー全国観光開発マスタープラン作成調査事前調査報告書」

Amat Olazabal, Hernán

2003, Huarás y Recuay en la secuencia cultural del Callejón de Conchucos: Valle de Mosna. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp. 97-12. Instituto Cultural Runa, Lima.

Felipe Varela Travesí y Sonia Bermúdez Lozano

2007, 6. Corredor Ecoturístico Comunitario Zona de los Conchucos. In *Propuesta de Nuevos Circuitos y/o Corredores Turísticos en las Regiones Norte, Centro y Sur del Perú*. pp. 52-62. Lima.

Herrera Wassilowsky, Alexander

2003, Patrones de Asentamiento y Cambios en las Estrategias de Ocupación en la Cuenca Sur del Río Yanamayo, Callejón de Conchucos. En: *Arqueología de las Sierras de Ancash*, pp. 221-249. Instituto Cultural Runa, Lima.

2005, Territory and Identity in the pre-Columbian Andes of Northern Peru

Ibarra Asencion, Bebel

2003, Arqueología del Valle de Puchca. Economía, Cosmovisión y Secuencia Estilística. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp. 251-330. Instituto Cultural Runa, Lima.

IGN (Instituto Geográfico Nacional)

1985, Mapa Físico Político (Dep. Ancash) 1: 400000, Lima.

INC (Instituto Nacional de Cultura)

2003, *Proyecto de Inventarismo de Información del Sistema Vial - Macro Región Centro - Camino Inca Callejón de Conchucos Región : Ancash*. INC, Lima.

2006a, *Program Qhapaq Ñan. Informe de Campaña 2005*. INC, Lima.

2006b, *Proyecto de Inventario Arqueológico en la Parte Centro y Norte del Callejón de Conchucos Región*. INC - Ancash, Huaraz.

INEI (Instituto Nacional de Estadística e Informática)

2004, *Almanaque de Ancash 2002 - 2003*. INEI, Huaraz.

2006, *Compendio Estadístico de Ancash 2005*. INEI, Huaraz.

Kuntur y Instituto de Montaña

2005, *Sistematización A dos años del Proyecto Inca Naani*. Huaraz, Perú.

Lau, George

2003, Evidencias radiocarbónicas para el estudio de las transformaciones culturales Recuay. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp. 135-160. Instituto Cultural Runa, Lima.

Leon Gomez, Miguel

2003, Espacio geográfico y organización social de los grupos étnicos del callejon de Conchucos. Durante los siglos XVI y XVII. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp. 257-466. Instituto Cultural Runa, Lima.

Mantha, Alexis y Manuel Malaver

2005, *Proyecto de Prospección Arqueología de los Sitios del Intermedio Tardío en la cuenca del Marañón, provincia de Huari, distritos de Huacchis y Rapayán. Margen izquierda del Río Marañón*. Informe de trabajo presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Moseley, M.

1992, *The Incas and their Ancestors*. Thames and Hudson, London.

ONERN

1975, *Estudio de suelos del Callejón de Conchucos*. INRENA, Lima.

Orsini, Carolina

2004, Transformaciones culturales durante el Intermedio Temprano en el valle de Chacas: Hacia el desarrollo de asentamientos complejos en un área de la sierra nor-central del Perú. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp.161-174, Instituto Cultural Runa, Lima.

2005, Proyecto de Mapificación Arqueológica "Valle de Chacas" Tercera etapa: Mapificación de la zona sur del Valle y excavaciones en el sitio de Balcón de Judas (provincia de Asunción, Ancash - Perú). Informe final presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Region Ancash (Gobierno Regional de Ancash)

2008a, *Gobierno Regional de Ancash Plan Estratégico Institucional 2008 - 2011*. Huaraz.

2008b, *Apostando por Nuestras Potencialidades Plan de Desarrollo Regional Concentrado 2008 - 2021 de Ancash*. Huaraz.

UGEL-M. Luzuriaga (Unidad de Gestión Educativa Local - Mariscal Luzuriaga)

2008, *Consejo Participativo Local de Educación Proyecto Educativo Local 2008 - 2021*. Piscobamba.

Wegner, Steven A.

2003, Identificando el area de dominio Recuay: Un extendido inventario cerámico para la identificación de asentamiento Recuay. En *Arqueología de la Sierra de Ancash*. pp. 121-134. Instituto Cultural Runa, Lima.

Zegarra Vigil, Mireya

Proyecto de Evaluación Arqueológica para el Mejoramiento y Rehabilitación de la Carretera: Catac - Huari - Pomabamba. Tramo: San Marcos (Km. 78 + 400) - Huari (Km. 110 + 000). Informe presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima.